文化芸術イベントと多文化共生
―「デカセギ　ブラジル」写真展、シンポジウム、交流コンサートの報告―

Cultural Arts Events and Intercultural Community Building:
A Report on "Dekasegui Brasil" Photo Exhibition, Symposium and Cross-cultural Exchange Concert

池上　重弘
文化政策学部　国際文化学科
IKEGAMI Shigehiro
Department of Intercultural Studies, Faculty of Cultural Policy and Management

立入　正之
文化政策学部　芸術文化学科
TACHIIRI Masayuki
Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

峯　郁郎
デザイン学部　デザイン学科
MINE Ikuro
Department of Design, Faculty of Design

本稿は、2019年度に静岡文化芸術大学で開催されたイベント『「デカセギ」の30年、過去から未来へ～写真展、シンポジウム、交流コンサート～』についての報告を通じて、文化芸術イベントが多文化共生推進に資する可能性を考察することを目的とした。企画の背景、各イベントの実施に向けた経緯を述べた上で、イベントの実施内容について詳述し、さらにその成果と意義をまとめた。

日系ブラジル人労働者やその家族について、自らも「デカセギ」労働者だったブラジル人写真家のマエダ氏が30年間に撮りためたモノクロ写真90点は、一般の日本人はなかなかうかがい知ることができない日系ブラジル人の就労や家族生活を生き生きと伝える作品となっていた。

シンポジウムでは日系人の就労が合法化されてからの30年の足跡をたどり、変化した点と変化していない点をめぐって議論した。変化した点としては、永住志向の高まり、日本社会への貢献意識の高まり、日本社会で専門職や総合職として活躍する第二世代の登場等が指摘された。一方、変化していない点としては、不安定な工場就労、受け入れ社会側の意識、日本で暮らす普通のブラジル人の功績や本音が紹介されない点が指摘された。

交流コンサートでは日本であまり知られていないブラジルの音楽が紹介された。ステージ最後のオリジナル童謡では、日本人の子どもたちとブラジル人の子どもたちが互いの言語も交えて合唱した。これは多文化共生の理念を具現化する機会となった。

文化芸術イベントは多文化共生の前提となる受け入れ社会側の意識変革に重要なインパクトを与えうる。定住化がすすむ中、子どもたちが交流するイベントは未来の多文化共生への「種まき」とも表現できる。

This paper reports on the event "30 years of " Dekasegui", from the past to the future-photo exhibition, symposium, cross-cultural exchange concert-" held at Shizuoka University of Art and Culture in 2019, and aims to explore the potential that cultural and artistic events have to promote of intercultural community building.

After describing the background of the project and the implementation process of each event, the details of the events were described, and their results and significance were summarized.

Ninety black-and-white photographs lively depict the working situation and daily life of Japanese Brazilian workers and their families, which are rarely known by ordinary Japanese people. The photos were taken over 30 years by a Brazilian photographer Maeda, who also used to be a "Dekasegui" worker himself.

At the symposium, we traced the footsteps of 30 years since the legalization of employment of Nikkei, and discussed what has changed and what has not changed. The following points have changed: the growing tendency toward becoming permanent residence, the growing awareness of contribution to Japanese society, and the emergence of the second generation who are active as professionals and general managers in Japanese society. On the other hand, the points that have not changed are as follows: unstable factory employment, and the lack of awareness of the host society toward migrants. It was also pointed out that the achievements and true intentions of ordinary Brazilians living in Japan have not been introduced.

At the cross-cultural exchange concert, Brazilian music, which is not well known in Japan, was performed. In the original nursery rhyme at the end of the stage, Japanese children and Brazilian children sang together in their own language as well as in each other's languages. This became an opportunity to embody the idea of intercultural community building.

Cultural arts events of a minority group can have an important impact on the change of consciousness on the part of their host society, and that impact is a prerequisite for intercultural community building. As the settlement progresses, an event where children on both sides interact with each other can be symbolized as "sowing seeds" for future intercultural community building.

1．はじめに

本稿は、2019年度に静岡文化芸術大学イベント・シンポジウム等開催費の助成を受けて開催されたイベント『「デカセギ」の30年、過去から未来へ～写真展、シンポジウム、交流コンサート～』（以下、本イベント）についての報告を通じて、文化芸術イベントが多文化共生推進に資する可能性を考察することを目的とする。具体的には、企画の背景、実施に向けた経緯を述べた上で、本イベントの実施内容について詳述し、さらにその成果と意義をまとめる。最後に多文化共生推進を目的とする文化芸術イベントをめぐる今後の課題と展望についてまとめる。

本イベントは本学の教員メンバーに加え、在浜松ブラジル総領事館職員と日伯交流協会メンバーが連携することで可能になった。その意味で多文化共生分野の地域連携の成果と述べることができる。本学教員メンバーは、実施代表者の池上重弘（文化政策学部・国際文化学科教授）が全体を統括し、総領事館、日伯交流協会、浜松市立東小学校等、外部との調整を担当したほか、実施分担者の立入正之（文化政策学部・芸術文化学科教授）が展示に関する監修を担

当、また同じく実施分担者の峯郁郎（デザイン学部デザイン学科教授）が広報に関する監修を担当した。在浜松ブラジル総領事館では、ベネジット・リベイロ領事（当時）が連携の窓口業務を担当した。さらに日伯交流協会では、児玉哲義副会長をはじめ理事たちが実施に尽力した。

2．本イベント企画の背景

浜松在住の日系ブラジル人写真家、ジュニオル・マエダ（Junior Maeda）氏[1] は、1990年の改正入管法施行間もない頃から、自身も工場労働者として働くかたわら、主として浜松のブラジル人コミュニティの姿を撮影してきた。2018年にJICA横浜の海外移住資料館で開催された企画展示「日伯110年の絆～在日ブラジル人－在日30年をむかえた日系人の歴史と日常－」では、マエダ氏の作品45点が展示され、1990年代の在日日系ブラジル人の日本での困難や母国ブラジルへの郷愁を抱える日常、および日本で活躍する日系ブラジル人の姿が伝えられた。同企画展を監修した日系ブラジル人研究者のアンジェロ・イシ武蔵大学教授によれば、この展示は在東京ブラジル総領事館による考案で、ブラジル系移住者の視点からどのように日本への「デカセギ史」を解釈・整理・総括しているかを垣間見る絶好の機会であった［イシ　2018：6］。

本イベントにおいては、上記企画展で展示された写真パネルの他に新たに用意した45点の写真パネルを加えた計90点を展示し、より広範に日本で暮らすブラジル人コミュニティの姿を紹介することを意図した。

先述のように、日系３世までの日本滞在と就労の合法化は1989年12月の入管法改正によって実現した（施行は1990年6月）。したがって、本イベント開催年の2019年は1989年の法改正から30年目の節目にあたる。日本でもっとも多くのブラジル人が在住する浜松市は、この30年間を振り返る場として最適の場であると言える。

また、静岡文化芸術大学には定住ブラジル人第二世代の学生たちが多数在籍し、その活躍はすでに全国でも広く知られている［池上　2018、2020］。その意味で、浜松にある静岡文化芸術大学での本イベント開催は、ブラジル人コミュニティの過去を振り返り未来を展望する上で極めて示唆に富むものとなると考えられた。

2019年4月から「特定技能」という新たな在留資格によってアジア諸国から青年層の労働者が来日するようになり、日本における外国人受け入れは新たな段階に入った［山脇　2019］。そうしたタイミングに際してブラジル人コミュニティの30年を総括し展望することは、時宜にかなうものでもあった。

こうした背景を踏まえ、写真展では30年の歴史をビジュアル資料でたどることを意図した。シンポジウムでは研究者、写真家、そして浜松地域でのブラジル人コミュニティの顔役が、30年の歴史を経るなかで変化したこと、変化しなかったことをそれぞれの立場から総括し、日本で暮らすブラジル人たちの今後を展望することにした。そして交流コンサートでは、日本ではあまり知られていないブラジルの音楽の紹介に加え、創作童謡を日本とブラジルの子どもたちが声を合わせて歌うことで、未来志向の多文化共生の姿をアピールしようと企図した。

3．本イベント実施に向けた経緯

3－1．写真展の企画

2018年11月、実施代表者の池上は、在浜松ブラジル総領事館で文化交流を担当するリベイロ領事から、ジュニオル・マエダ氏の写真パネルを静岡文化芸術大学で展示する写真展の共催について打診を受けた。前述のイシ［2018］の文章を読み、2018年8月30日に横浜の海外移住資料館でマエダ氏の写真展示を観ていた池上は、その打診を受け入れ、11月以降、リベイロ領事およびジュニオル・マエダ氏と調整を重ねた。写真パネルと説明パネルの作成、フライヤー、ポスター等の広報ツール、当日来場者向けのカタログについては、ブラジル総領事館の監修と費用負担で用意されることになった。一方、展示の準備と撤収、展示期間中の運営等については、静岡文化芸術大学側の企画と費用負担とすることが決まり、役割分担が明確になった。

マエダ氏の作品は2018年以降、静岡県内でも展示される機会があったが、説明パネルのポルトガル語の翻訳を自動翻訳に頼っていたため、日本人の観客にはマエダ氏が写真とポルトガル語の説明文に込めた想いが十分に伝わりにくい作品もあった。そこで今回はすべての展示パネルについて新たに説明文を日本語訳することにした。在浜松ブラジル総領事館のスタッフと本学関係者が連携して日本語として自然な表現になるよう訳出した。新しい日本語訳は会場での説明パネルのみならず、当日来場者に配布したカタログの説明文章にも反映された。

3－2．シンポジウムの企画

在浜松ブラジル総領事館から当初提案されたのは、本学における写真展の開催だけだった。しかし、ギャラリー空間を提供して写真展を開催するだけなら他の機関でも可能であるし、実際のところ、2019年3月に静岡県男女共同参画センター「あざれあ」で開催された静岡県国際交流協会の30年記念イベントでは施設内のスペースでイーゼルを用いてマエダ氏の写真パネルを展示していた。したがって、大学のギャラリーで展示するだけでは、展示点数が倍増する以外、目新しさに乏しい。そこで、写真展に合わせてシンポジウムを開催し、学術的な観点と生活者としての当事者の観点から、1989年12月の入管法改正以降30年にわたるブラジル人コミュニティのあり様を振り返ることにした。

3－3．交流コンサートの企画

浜松市に事務局をおく日伯交流協会は、スポーツ、文化、教育の分野で日本とブラジルの交流を促進すべく2009年から活動を続けている。設立10周年にあたる2019年に、ブラジルと関係の深いピアニスト、赤津ストヤーノフ樹里亜氏[2] によるコンサートの開催企画を立てていたところ、集客面での相乗効果を期待して、写真展の開催期間に合わせてコンサートを開催することにした。

日伯交流をテーマにしたこのピアノコンサートでは、クラシックの名曲、日本の童謡、赤津氏のオリジナル曲、そしてブラジルの作曲家による音楽の紹介が主眼だったが、それに加えて日本の子どもとブラジルの子どもの音楽交流を披露する機会となることも意図した。具体的には、赤津

氏自身が作詞作曲した「小さな花と大きな空」という創作童謡[3] を日本の公立小学校に通う子どもたちとブラジル人学校に通う子どもたちが一緒のステージで歌う場面の実現を目指した。日本の学校としては本学に隣接する浜松市立東小学校、ブラジル人学校としては日伯交流協会の理事の一人が経営するEASブラジル人学校浜松校に企画を提案し、赤津氏による６月のミニコンサートの機会を通じて、子どもたちに交流企画への参加を呼び掛けた。その結果、両校から数名ずつが参加を希望し、10月の本番に向けて7月以降３回のリハーサルを本学で行った。

この創作童謡を通じた交流企画についてはNHK静岡放送局が関心を示し、継続的な取材に訪れた。学校でのミニコンサート、本学でのリハーサル、そして本番の様子を取材した結果が、10月下旬のニュース番組内で特集として放送された。

３－４．学生実行委員会

本イベントは展示、シンポジウム、コンサートからなる複合企画であり、また日本語とポルトガル語の両言語対応という多言語企画でもあった。そこで本学で学ぶブラジル人の定住外国人学生も含め、実施代表者、実施担当者の授業等を通じて学生たちに実行委員会への参加を呼び掛けた。

その結果、計16名の学生実行員会を組織することができた。学生の所属学科の内訳は、国際文化学科6名、文化政策学科2名、芸術文化学科8名であった。このうちブラジルにルーツを持つ学生は国際文化学科の3名だった。学生実行員会は実行委員長1名、展示チーム8名、シンポジウムチーム4名、コンサートチーム3名の体制で、本イベントのそれぞれの企画について準備を進めた。ただし、実際のイベントの折には、チームの区分を越えて学生実行委員会全体として実施に協力した。

４．イベントの成果と意義

４－１．写真展

2019年10月26日(土)から11月4日(月･祝)にかけての10日間、静岡文化芸術大学西ギャラリーを会場に、在浜松ブラジル総領事館と静岡文化芸術大学文化・芸術研究センターが共同で主催する写真展「デカセギ　ブラジル－写真家ジュニオル・マエダが見た30年の軌跡－」を開催した[4]。

今回の写真展に際し、マエダ氏は来場者向けカタログの冒頭に以下のようなメッセージを寄せている（カタログではポルトガル語と日本語を併記されている）。

> デカセギの形態の変化は、私たちに最初の夢を忘れさせ、私たちは進むべき道の再構築を余儀なくされました。現在、私たちは夢みた物質的な財を得ることにのみ力を注ぐだけでなく、私たちを歓迎してくれる国において日々増え続ける社会的文化的統合の現実に適応しなくてはなりません。私たちは価値あることを学びそれを積み重ねるためにここにいるということ、私たちはひとつのコミュニティであること、そして私たちは向上していくチャンスがあるということを示すことができます。このチャンスを通して、私たちは日々進化していくことができるのです！

90点の写真パネルは、本学西ギャラリー内の壁面に沿って展示された。時計回りに展示パネルを観覧すると、1990年代初頭のデカセギ開始の頃から時間をたどって最近の写真に至るように工夫された。

ギャラリー入口から見て左面手前には、工場での労働にまつわる写真が配置された。たとえば、工場の隅にある休憩場所に置かれた小さな椅子４脚に焦点を当てながら作業スペースと休憩場所を分かつ白線を含めて上から撮影した写真には「境界線」というタイトルが付いており、「その線は休憩場所との境界線。そこは日々懐かしい思い出話に花が咲く舞台。そこで夢が生まれ、心の傷を癒した」との説明文がついている。工場でのデカセギ労働を経験したブラジル人労働者だからこそ描ける世界であると言える。

ギャラリーの左側奥には、1990年代の単身デカセギ労働者たちの日常を描いた作品が配置された。集合住宅の１階にある郵便受けを開けようとする仕事帰りの男性を遠景で撮影した「期待」という作品の説明文は、「帰宅して郵便受けを開くときに湧き上がる様々な感情」と記されている。また、ブラジルへ送る手紙をしたためている手をアップで撮影した写真には「真実のテーブル」とタイトルが付けられ、「最高の詩が生まれる場所、大きな感情が生まれ育つ場所・・・寂しさの涙の重みに耐える場所」との説明文が付いている。1990年代初めは単身の男性が家族をブラジルに残してデカセギに来ることが多く、孤独感や寂しさを描き出す作品が多い。

ギャラリー正面から右側奥にかけては、工場労働者以外のブラジル人の肖像写真が配置された。起業家、タレント、力士、弁護士、作家、パラリンピック選手、歌手など、様々な形で日本での活躍の舞台を得た人々が誇らしげな表情でフレームに収まっている。たとえば、ネギの苗がびっしり詰まったビニールハウスの中、立膝姿で自信に満ちた笑顔をレンズに向けている男性の肖像写真は「斎藤・トシオ・バルテル」とタイトルが付けられ、「90年代に出稼ぎとして移住し、農業で最大の成果を収め、『ネギの王様』として知られる。様々な分野における偉大な起業家である」と説明されている。

ギャラリーの右側手前に配置された写真では、日本で育った新しい世代にも光を当てている。たとえば、母親と並び立った4人の子どもたちがそれぞれ中学、高校、大学の卒業証書を手にして笑顔で写っている写真には「闘い」というタイトルと共に、「努力は未来へのチャンスを生み出す」との説明文が付いている。また、集合住宅の廊下を歩く祖母と孫を写した「世代」というタイトルの写真には、「デカセギ世代の両端」という説明が付されている。デカセギで来日した第一世代の高齢化が進み、なかには日本の学校に通う孫を持つ人も現れてきていることを示している。

来場者を対象に、もっとも印象に残った１点を投票してもらうアンケートを実施した。その結果は表１のとおり、1,215件の回答（一人の来場者が複数の写真を挙げる場合もあったため複数回答も認めて集計）のうち、もっとも得票が多かったのは「疲れることのない待ち時間」(118票)、次いで「見守る」(86票)、さらには「ハグ」(68票)と続いた。

「疲れることのない待ち時間」は1990年代前半のデカ

表１　写真展での「気にいった１枚」投票結果

順位	投票数	タイトル
1	118	疲れることのない待ち時間
2	86	見守る
3	68	ハグ
4	40	15分間
5	37	現代的
6	36	期待
7	34	闘い
8	33	デカセギカレンダー
8	33	繋がり
9	30	コスト
10	29	境界線

写真１　「疲れることのない待ち時間」
何時間もずっと、待つか待たせるか・・・同じ目的のための二つの場面。

写真３　「ハグ」
友情と幸福、孤独の終わり。

写真２　「見守る」
努力の未来。

写真４　写真展会場

セギ初期の様子を再現した写真で、浜松市のランドマーク「アクトタワー」の横にある公衆電話ボックスに並び、ブラジルへの電話の順番を待つブラジル人の姿が描かれている。第２位の「見守る」は来場者向けカタログの表紙にも掲載された印象的な写真で、膝をついた母親がセーラー服姿の娘にリュックサックを渡す場面を写しとっている。「ブラジル人の保護者は日本の学校教育に理解がない」としばしば言われるが、この写真は「努力の未来」という短くも力強い説明文にあるように教育に対する親の期待を描き出している。第３位の「ハグ」は、ブラジル人らしい深い友情で抱き合う3人の姿が見る者の心を打つ。

この写真展には10日間でのべ1,200名の来場者があった。本学の教職員や学生のみならず、ブラジル人を含む一般の方々の来場も多かった。また、静岡県内だけでなく愛知県や関東の都県からの来場者もあった。日系ブラジル人労働者やその家族について、自らも「デカセギ」労働者だったブラジル人写真家のマエダ氏が30年間に撮りためたモノクロ写真90点は、一般の日本人はなかなかうかがい知ることができない日系ブラジル人の就労や家族生活を生き生きと伝える作品となっており、来場者の深い共感を呼んだ。来場者のコメントから積極的な評価と改善点の指摘について、主なものを以下に引用する。

（積極的な評価）

・これまで気付くことがなかった想いに気付かされました。ありがとうございました。
・ずっと日本で暮らしている私も共感できる写真が多くあった。
・デカセギの歴史を伝えるのに、講演会などではハードルが高いけれど、その点写真展はとても良いと思いました。
・在浜松のブラジルの方々について理解を深めたいとは潜在的には思っていても、きっかけがなかなか無いので、今回の写真展はとても良い企画だと思いました。
・感動した。写真でこんなに心をうごかされたのは初めて。
・写真に添えられたタイトルと短い文章が良かった。切なさとやりきれなさと時には未来へのまなざし、ユーモアも忘れていなくて。
・ストーリー性がすごく素敵だった。デカセギの厳しさも合間に感じられる少しの幸せも全部伝わってきた。見られて良かった。
・入って順路通り見ました。デカセギ初期は皆顔に表情がありませんが、だんだん皆の顔に表情が出てきて笑顔になってゆく過程がよかったです。

（改善点の指摘）

・もう少し字を大きく。
・撮影した年がわかるとよかった。日常の写真から、声が聞こえてきそうでよかった。
・時代背景の紹介等がわかると、もっと状況理解が進んだのかもしれない。

４－２．シンポジウム

写真展開催期間の初日にあたる2019年10月26日(土)午後、写真展の関連企画としてシンポジウム「『デカセギ』の30年、過去から未来へ」を本学南176大講義室で開催した。静岡文化芸術大学文化・芸術研究センターと在浜松ブラジル総領事館が共同で主催した[5)]。シンポジウムに先だって、写真展の開会式を行い、在浜松ブラジル総領事館のフーバルチ・エルネスト総領事と静岡文化芸術大学の横山俊夫学長がスピーチをした（横山学長は当日欠席だったため池上が代読）。エルネスト総領事のスピーチはポルトガル語で行われ、総領事館関係者が日本語に翻訳したが、他の部分はすべて日本語で行われた。

「日本におけるブラジル人コミュニティの過去と未来」をテーマにしたシンポジウムではまず、司会を担当する池上重弘（静岡文化芸術大学教授）が「問題提起～静岡県の３つの調査結果から～」との演題でこの30年間の大きな動向を整理した上で、静岡県が2007年、2009年、2016年に実施した外国人調査のうちブラジル人に関するデータを抽出して分析した結果を発表した。ブラジル人の場合、永住など身分資格での日本滞在が圧倒多数を占め、定住化、さらには永住志向の増加が認められる。自分の意志で来日した第一世代の高齢化が進むが第一世代の日本滞在も長期化し、その子どもたちの第二世代の中には日本で生まれ日本の教育を受けている者も増えてきた。単純作業従事の就労構造は大きく変わらない一方、職種多様化のきざしも見え始めている。第二世代の多くは親世代と同様、単純労働の工場労働者として間接雇用の派遣形態で働き、日本語もポルトガル語も不十分なまま底辺化する者がいる一方、中には日本で大学を卒業してグローバル人材として活躍する者も現れはじめた。第二世代の場合、社会経済的階層の上下拡大が進んでいることを示した。

３人のパネリストによる個別報告では、まずジュニオル・マエダ氏（写真家）が写真展に展示されている作品をスクリーンに映し出しながら日本のブラジル人コミュニティの変化をたどり、定住化の進展を背景に日本社会で生きてゆくための力（具体的には日本語能力）を身に付ける必要性を強調した。

続いて児玉哲義氏（日伯交流協会副会長、世界武士道空手連盟 魂誠會館長）がブラジルの日系人コミュニティで育った自身の経験からはじめ、来日後の経験、起業、自らの空手道場の開設、青少年育成のための夜回り活動、日伯交流協会設立、ブラジル政府からの叙勲、そして東日本大震災での支援活動に至る道をたどり、個人のライフヒストリーと重ね合わせながら日本におけるブラジル人コミュニティの30年を振り返った。その上で、教育の重要性を指摘し、弁護士と中学校教諭のように専門性を持って活躍する第二世代のブラジル人の若者の姿を紹介した。

写真５　シンポジウムのパネリスト

写真６　フロアとの討論

最後にアンジェロ・イシ氏（武蔵大学教授）が登壇した。イシ氏は、最近では自己紹介の際に「日系ブラジル人三世」ではなく「在日ブラジル人一世」と戦略的に自己規定を変更するようになったと述べた上で、以下の４つの時代区分で日本におけるブラジル人コミュニティの性格の変化を論じた。すなわち、１)「Uターン」から「出稼ぎ」へ：1990年代以前の時代、２)「出稼ぎ」から「デカセギ」へ：1990年代、３)「デカセギ」から「定住」(「在日ブラジル人」）へ：2000年代、４)「移民」(在日ブラジル人）から「在外ブラジル人」へ：2010年以降、という時代区分である。

4人の登壇者と50名ほどのフロア参加者とのディスカッションでは、1989年12月の入管法改正で日系人の就労が合法化されてからの30年の足跡をたどり、変化した点と変化していない点をめぐって議論が展開した。変化した点としては、持ち家比率の向上等からもうかがえる永住志向の高まり、東日本大震災のボランティア活動に顕著に表れている日本社会への貢献意識の高まり、日本社会で専門職や総合職として活躍する第二世代の登場等が指摘された。一方、変化していない点としては、間接雇用の不安定な就労形態で工場労働に従事する者が多数を占める点の他に、受け入れ社会側の意識が依然として外国人を「お荷物」と捉えている点、そしてマスメディアや研究者は成功例や悲惨な例のように両極端の一方を取り上げてスポットライトを当てることが多く、日本で暮らす普通のブラジル人の功績や本音をとらえきれていない点が指摘された。このように、今回のシンポジウムは、ブラジル人の大学教授、支援者、写真家による知見を日本語で共有する貴重な機会となった。

４－３．交流コンサート

写真展開催期間の2日目にあたる2019年10月27日(日)午後、日伯交流協会と静岡文化芸術大学文化・芸術研究センターの共同主催で、浜松市在住のピアニスト、赤津ストヤーノフ樹里亜氏による「郷愁と希望」と題した日伯交流ピアノコンサートを本学講堂にて開催した[6)]。

冒頭、主催者を代表して日伯交流協会の高木昭三会長（浜松いわた信用金庫会長）が挨拶をした。第一部は赤津氏のオリジナル曲やクラシックの名曲を中心に６曲、第二部はクラシックの名曲（一部はブラジル音楽風にアレン

表２　「小さな花と大きな空」の歌唱言語

	浜松市立東小児童	EASブラジル人学校児童
	日本人	ブラジル人
1番	日本語	**日本語**
2番	**ポルトガル語**	ポルトガル語
3番	**英語**	**英語**
4番	日本語	ポルトガル語
5番	日本語	ポルトガル語

太字は母語以外の言語で歌唱する部分。

写真７　交流コンサートで演奏する赤津氏

写真８　創作童謡を一緒に歌う日本とブラジルの子どもたち

写真９　アンコールに応える子どもたち

ジ）やブラジルの音楽家による作品を中心に９曲が披露された。ブラジルで音楽の専門的教育を受けたピアニストによって日本ではあまり知られていないブラジルの音楽が紹介され、音楽を通じたブラジル理解の一助となった。

コンサートの最後は、日本の子ども（浜松市立東小学校の児童６名）とブラジル人学校の子ども（エスコーラ・アレグリア・ジ・サベール浜松校の児童７名）が、赤津氏の作詞作曲によるオリジナル童謡「小さな花と大きな空」（第１回松戸童謡作詞作曲コンクール優秀賞受賞作品）を日本語、英語、ポルトガル語を交えて合唱した。

表２に示したとおり、どの子どもたちも母語以外に２つの外国語に挑戦することになった。１番は日本語なのでブラジル人児童が日本語に挑戦した。２番はポルトガル語なので日本人児童がポルトガル語に挑戦した。３番は英語なのでお互いがそれぞれの母語でないもうひとつの言語に挑戦した。そして４番と５番は日本人の子どもは日本語で、ブラジル人の子どもはポルトガル語で歌った。ポルトガル語版の歌詞は同じ内容でも日本語版より歌詞の文字数が多く、その分メロディにも若干修飾が付く。歌詞の重なりと音符の装飾が音楽に幅を与え、「違うからこそ生まれる調和」を生み出した。日本人の子どもたちとブラジル人の子どもたちが大学生のサポートを受けながら、互いの言語も交えた合唱を通して多文化共生の理念を具現化する機会となった。とくにブラジルにルーツを持つ学生たちがブラジル人学校の子どもたちをサポートできたのは、本学の特徴と言えよう。ひとつの歌を一緒に歌った経験を通じて、子どもたちは今後、心の垣根を低くして文化的背景の異なる人々と関わって行くことが期待される。

コンサートの来場者は約250名で、終了後のアンケートでは以下のような評価が得られた。音楽が持つ多様な人々を結びつける力が会場の聴衆を捉えたことがうかがえる。

・着物でピアノを弾いている姿も印象的でした。
・デカセギ写真展との併設が良かった。
・子どもたちいっしょに歌ったこととても良かったです。演奏良かったです。
・人間心の交流はすぐ横にある日常相手を理解し、言葉、意見、挨拶を交わすことが大事。

４－４．メディアでの紹介

本イベントはマスメディアからの注目度が高く、以下の通り、多様なメディアで紹介された。

（１）写真展

○読売新聞　2019年10月27日（日）朝刊・29面
「ブラジル人 日本の日常 入管難民法30年 日系３世が写真展」

○NHK静岡放送局　2019年10月30日（水）
「日系ブラジル人 仕事や生活写真展」

（２）シンポジウム

○朝日新聞　2019年11月7日（木）朝刊・30面
「日系ブラジル人 変わる姿 入管法改正30年 浜松で写真展・シンポ」

○静岡新聞　2019年10月27日（日）朝刊・21面
「『デカセギ』来日30年 浜松でシンポ 永住望むブラジル人増 就労形態、高齢化課題」

○中日新聞　2019年10月27日（日）朝刊・10面
「共生 過去を学ぶ未来へ 中区でシンポ日系ブラジル人ら登壇」

（３）交流コンサート

○NHK静岡放送局　2019年10月28日（月）
「日本・ブラジル交流コンサート」

○NHK静岡放送局　2019年11月7日（木）
「共に歌い多文化共生の一歩を」
（学生実行委員の定住ブラジル人学生にスポットを当てた紹介）

５．むすびにかえて～課題と展望～

以上、本イベントの成果と意義について述べてきた。最後に本イベントから導かれた今後の課題と展望についてまとめたい。

本イベントのうち写真展や交流コンサートのような文化芸術活動を通じた多文化共生の取り組みは一般に３F（Food, Fashion, Festival）と称され、一時的かつ表面的な異文化交流機会として批判されがちである［池上 2020：93］。しかしシンポジウムにおいて「受け入れ社会側の意識がこの30年間変わっていない」との指摘がブラジル人登壇者からあったとおり、浜松のような外国人が多い都市であっても日常生活の中で外国人の存在が視界には入いるものの具体的な付き合いは乏しく、相互理解にはほど遠い現状がある。

こうした現状を解消するには、日本社会に多様な文化的背景を持つ人々が暮らしていることを意識し、その生活の内実に思いを馳せる機会を幅広く提供することが必要である。その意味で、今回の写真展は多くの日本人が思い及ばないブラジル人たちのこの30年間の足跡と家族や友人への熱い気持ち、そして未来への想いを雄弁に伝える絶好の機会となった。

文化芸術活動は外国人当事者がその活動を通じて自己のアイデンティティに関する認識を深めたり、自己効力感を高めたりする側面も有している［池上　2020：93］。今回の交流コンサートで創作童謡合唱をサポートした本学の定住ブラジル人学生は、NHKの取材の中で、日本とブラジルの両方につながりを持つ自分だからこそ、両者をつなげることができるという趣旨を話していた。ブラジル人の定住化が進み、移住第二世代、第三世代が増えてゆく中で、子どもたち世代が交流できる機会の提供は未来の多文化共生への「種まき」として重要である。

注

1) ジュニオル・マエダ氏は1975年にブラジル連邦共和国リオ・グレンデ州の州都ポルトアレグレで生まれた日系３世の写真家。1990年に来日してから浜松で暮らす。日系ブラジル人デカセギ労働者の日常を再現するモノクロ写真作品を数多く発表してきた。TEDxHamamatsu 2018にスピーカーとして登壇した。

2) 赤津ストヤーノフ樹里亜氏は福島県いわき市出身のピアニスト・作曲家。ブルガリア人の父と日本人の母はいずれも音楽家で、３歳からピアノを始め、福島県内の高校を卒業後、ブラジルの作曲家ヴィラ・ロボスに魅せられてブラジルで８年間の音楽教育を受け、2005年にバイーア連邦大学音楽院を首席で卒業した。その後多くの国際コンクールで受賞、古典から現代音楽まで幅広く演奏するのみならず、ジャンルを越えたオリジナル曲も作曲する。国内外で癒しのコンサートを行うほか、幼稚園歌や童謡の作詞作曲など多岐にわたる音楽活動を展開

している。

3) 「小さな花と大きな空」（作詞作曲：赤津ストヤーノフ樹里亜）は第1回松戸童謡作詞・作曲コンクール（2018年度）の「優秀賞」受賞作品である。日本語の歌詞の他に、赤津氏自身の翻訳で英語版、ポルトガル語版、ブルガリア語版の歌詞もある。

4) 写真展については、静岡県、静岡県教育委員会、静岡県国際交流協会（SIR）、浜松市、浜松市教育委員会、浜松国際交流協会（HICE）、KOWA、PORTAL MIEから後援を得た。

5) シンポジウムについては、静岡県、静岡県教育委員会、静岡県国際交流協会（SIR）、浜松市、浜松市教育委員会、浜松国際交流協会（HICE）から後援を得た。

6) 交流コンサートについては、在浜松ブラジル総領事館、静岡県、静岡県教育委員会、静岡県国際交流協会（SIR）、浜松市、浜松市教育委員会、浜松国際交流協会（HICE）から後援を得た。

引用文献

池上重弘．2018．「移住者の第二世代による日本社会への発信－浜松市のニューカマー第二世代の中心に」移民政策学会設立10周年記念論集刊行委員会編『移民政策のフロンティア－日本の歩みと課題を問い直す』明石書店、251-255ページ．

池上重弘．2020．「文化芸術活動を通じた多文化共生の取り組み」松本茂章編『文化で地域をデザインする－社会の課題と文化をつなぐ現場から』学芸出版社、92-106ページ．

イシ、アンジェロ．2018．「総論　雇用危機から10年～デカセギ史の終わりか、新たな時代の幕開けか～」『Mネット』第199号、6-7ページ．

山脇啓造．2019．「第21回　2019.07.10 新たな外国人労働者の受入れと共生社会づくり（コラム　多文化共生2.0の時代）」『多文化共生ポータルサイト（一般財団法人自治体国際化協会）』2019.12.20 http://www.clair.or.jp/tabunka/portal/column/contents/114405.php（2020年11月11日最終閲覧）